

モーツァルト巡礼—その11

K518 水谷 康男

K286 は、ノットルノ ニ長調 (セレナーデ第8番) です。1776年12月か翌年1月にザルツブルクで作曲されたと思われています。演奏時間15分程で4組からなるホルン二本ずつとヴァイオリン二部 ヴィオラ チェロ&バスの編成よりなる4つのオーケストラのための作品です。第一楽章 アンダンテ、第二楽章アレグレット・グラツィオーソ、第三楽章 メヌエット の3楽章よりなる 佳品です。

K287 は、ディベルティメント 第15番 変ロ長調 です。1776年に、K247と同じく、ザルツブルクのロドロン伯爵夫人の命名祝日(6月13日)を祝って作曲したとみられるもので現在は同年6月に作曲されたという説が有力です。弦楽四重奏に2本のオブリガートホルンを加えた六重奏の編成よりなります。第一楽章 アレグロ、第二楽章 アンダンテ主題による変奏曲、第三楽章メヌエット、第四楽章 アダージョ、第五楽章メヌエット、第六楽章はロンドの終曲です。演奏時間は40分程の大曲です。しかも、1年前のK247と較べると、はるかに成熟度の増した傑作と呼ばれるほどの仕上がりとなっています。特に第二楽章の主題は、とても耳に心地よい旋律で、当時の「さあ急げ、俺はハンス、くよくよしない」の民謡です。また、第四楽章はホルンを省いた弦楽だけによる、叙情的なアリア風な主題がとても魅力的です。第六楽章は、アンダンテの序奏に始まり、主部のアレグロ・モルトは「百姓女の猫が逃げた」を主題としたもので、娯楽音楽の目的を忘れてはいません。

K288 は、未完成のディベルティメントですが、このCD全集には収録されていませんでした。

K289 は、ディベルティメント 第16番 変ホ長調です。1777年初夏の頃ザルツブルクにおける作品です。これはK213に始まる大司教宮廷の6曲の食卓音楽の最後のものです。楽器編成もそれらに共通する オーボエ、ホルン、ファゴット各二本という編成です。第一楽章は短いアダージョの序奏で始まるアレグロのソナタ形式、第二楽章メヌエット、第三楽章アダージョも同じ変ホ長調で作曲されています。第四楽章の終曲もソナタ形式によったプレストで書かれています。ホルンとファゴットが軽やかに羽ばたく急速なリズムに駆り立てられて緊迫感のある終止へと繋がっています。演奏時間は約15分です。

K290 は、行進曲 ニ長調です。1773年7月にザルツブルクあるいは同じ年の秋にウィーンで作曲されたとみられています。K205のディベルティメントの開始曲あるいは終曲として演奏するためのものでありました。ヴァイオリン、ヴィオラ、バス各一本とホルン2本による小さな編成で、演奏時間は約3分です。

K291 は、ミハエル・ハイドンの作と分かり、本CD全集にも収録されておりません。

K292 は、ファゴットとチェロのためのソナタ 変ロ長調で、1775年初めにミュンヘンでデュルニッツ男爵のために作曲されたものと言われています。なぜか、本CD全集には含まれていませんが、YouTubeには、複数の演奏が収録されています。二つの低音楽器という珍しい組み合わせで、ファゴットがソロの役割を務めています。3つの楽章(第1楽章アレグロ、第2楽章アンダンテ、第3楽章ロンド・アレグロ)よりなる演奏時間10数分の簡潔ですが、味わい深い作品と思います。

K293 は、オーボエ協奏曲 へ長調の断片です。1777年にザルツブルクで、宮廷楽団のオーボエ奏者のために作曲されたものですが、楽譜が紛失してその一部だけが残っているものとみなされています。この曲も本CD全集には収録されておりませんが、YouTubeには、複数の演奏が収録されています。

続く K294、K295、K295-a は、いずれもレシタティーヴォとアリアで、K295 は、テノール、他の2曲はソプラノのために作曲されています。いずれの曲も、第2回のパリ旅行に行く道の途中にあるマンハイムで翌1770年2月の演奏会のためのアリアです。内容はいずれも淡い恋心を歌ったもので、それぞれの歌手の技量に合わせて作られたものと言えます。



Aloysia Weber

K294 は「アルカンドロ、それを告白しよう」というレシタティーヴォと、「どこから来たのか、私は知らない」のアリアからなっています。最初は、マンハイムの名テノール歌手アントンラーフのために作ったのですが、

64歳と高齢のため、その音域を超えていたため、ソプラノ歌手アロイジア・ウェーバーのために作曲したもので彼は、その頃、彼女に恋していたためとても力が入った作品といえましょう。

K295は、アリア「わたくしの言葉が信じられないなら」で、上記のテノール歌手 アントラーフのために作曲されたものです。マンハイムの名テノール歌手で、前述のように彼の音域が狭くなっていたことを考慮した作品となっています。

K295aは、マンハイムにおける3曲のアリアの最後のもので、「もうたくさん、あなたの勝ちだ」のレシタチーヴォと「あ、私をすてないで」のアリアから構成されています。マンハイムのフルート奏者ヨハン・バプティスト・ヴェントリングの妻ドロテアの求めに応じて作曲したものです。叙情豊かな美しさは、夫人を狂喜させたと言われています。

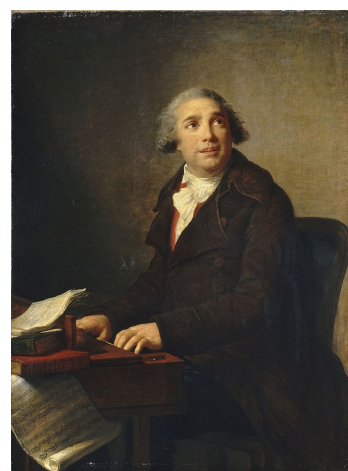


Aloysia Weber

K296は、ヴァイオリン・ソナタ 第24番 ハ長調 1778年3月、マンハイムでの作で、5つのマンハイムでのヴァイオリン・ソナタ (K301、K302、K303、K305、K296) の最後の曲で、唯一の3楽章 (第1楽章: アレグロ・ヴィヴァーチェ、第2楽章: アンダンティーノ・カンタービレ、第3楽章: ロンド・アレグロ) の作品です。この後、パリへ向かったこともあって、1781年にウィーンのアルタリア社から、他のパリ時代の5曲と共に出版されました。曲はいざ、パリに向わん という意気込みに溢れた華麗なピアノ主体の仕上がりになっています。

K297は、交響曲 第31番 ニ長調「パリ」で、いよいよ2度目のパリ訪問となります。この曲については、すでに交響曲を纏めて記述していますので、ここでは省略します。

K298は、フルート四重奏曲 イ長調で、1778年春から夏にかけての間に、つまり母が病気になる前に作曲されたとされていましたが、現在では第3楽章のロンド主題がパイゼェルロ「恋のとりこ」の中のリエッタを転用したものであることから1786年にウィーンで作曲されたものとされています。アンダンテで始まる変奏曲、メヌエット、アレグレット・グラツィオーソの3楽章からなる10分余りの作品です。



Giovanni Paisiello

K299は、たぶん誰もが大好きなフルートとハープのための協奏曲 ハ長調 です。この曲の華麗な美しさは、まさにパリの社交界を描写しているような華やかさに満ち溢れ、聴くものを幸せな気分にさせてくれます。モーツァルトの手紙によって、1778年4月に完成されたと判断されるものの、草稿には自筆の日付の記入がなく、しかも、第二次大戦後東ベルリンで盗難にあったままになっています。ロンドンで7年間公使を務めて1777年にパリに帰ってきたばかりのギネ公爵は、フルートを吹き、しかもその娘はハープが上手であった。そこで、この父と娘のために書いたもので、まだハープが半音処理が難しい不完全な楽器であったため、ハ長調の調性が選ばれたと思われます。管弦楽編成は、オーボエ、ホルン各2本そしてヴァイオリン2部、ヴィオラ、チェロ&バスの弦楽からなります。アレグロ、アンダンティーノ、ロンド・アレグロの三つの楽章から構成されています。演奏時間は約30分のパリ時代のモーツァルトを代表する傑作です。



K299b (K.Anh.10) は、バレエ音楽「レ・プティ・リアン」です。序曲から始まる全14曲の小品からなる可愛らしい作品です。1778年5月から6月にかけて、パリで活躍する舞踏家ノヴェルのために作曲されたバレエ音楽です。10秒あまりの短い曲から一番長い3分あまりの序曲と短い曲ばかり14曲合わせて20分程の珠玉の小品集です。フルート、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット各二本とティンパニーそしてヴァイオリン2部、ヴィオラ、チェロ・バス の弦楽よりなるはなやかな編成です。記念文集第1号(モーツァルト没後200年記念)「レ・プティ・リアン」発刊の題名にも使用されましたので、古参会員にはとても思い出深い曲でもあります。

K300 は、ガボット 変ロ長調です。この曲は 前述の「レ・プティ・リアン」の一部になるはずでしたが、使われないまま残ったものと考えられています。演奏時間約2分程の小品です。

K301 から K306 までの6曲は、ヴァイオリン・ソナタです。K304 と K306 を除く、いずれの曲も 1778年 はじめに パリへ向かう途中のマンハイムで作曲されました。そして、これら6曲をパリで出版し、マンハイムのカール・テオドール選挙候妃マリア・エリーザベト夫人に捧げられたため、「マンハイム・ソナタ」と呼んでいます。



Karl Theodor & Elisabeth



マンハイムの宮殿

K301 は、ヴァイオリン・ソナタ 第25番 ト長調で、アレグロ・コン・スピリト、アレグロの2楽章よりなります。

K302 は、ヴァイオリン・ソナタ 第26番 変ホ長調で、アレグロ、「ロンド」アンダンテ・グラツィオーソの

2 楽章よりなります。

K303 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 27 番 ハ長調で、アレグロ、テンポ・ディ・メヌエットの 2 楽章よりなります。

K304 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 28 番 ホ短調で、アレグロ、テンポ・ディ・メヌエットの 2 楽章よりなります。この曲と K306 は、1778 年初夏から夏にかけて、パリで作曲されました。このソナタ群では唯一の短調の作品です。同年 7 月の母の死による慟哭の作品と思い込んでいましたが、アロイジアとの決別による悲しみの作品とも考えられています。

K305 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 29 番 イ長調で、アレグロ・ディ・モルト、アンダンテ・グラツィオーソの主題による変奏曲の 2 楽章の作品です。

K306 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 30 番 ニ長調で、アレグロ・コン・スピリト、アンダンティーノ・カンタービレ、アレグレットの 3 楽章よりなります。それまでの 5 曲と較べ、唯一の 3 楽章で、協奏曲的なピアノとヴァイオリンが火花を散らすような作品となっています。

K307 は、アリエッタ「鳥よ、年ごとに」です。続く K308 のアリエッタ「寂しい森の中で」と共に、2 度目のパリ旅行の途中、マンハイムで作られた、ソプラノのためのフランス語の歌曲です。

K309 と K311 は「マンハイム・ソナタ」と呼ばれるピアノ・ソナタで、1777 年から翌年にかけてのパリ旅行の途中で滞在したマンハイムで作曲したことから、こう呼ばれています。そして、1778 年に訪れたパリで作曲された、K310、K330、K331、K332、K333 の 5 曲のピアノ・ソナタは「パリ・ソナタ」と称されています。

K309 ピアノ・ソナタ 第 7 番 ハ長調は、1777 年 11 月にマンハイムで完成されたものです。マンハイムのカンナビヒ氏の娘ローザは達者にピアノを弾き、そのローザが弾くことをイメージして作曲したとされています。アレグロ・コン・スピリトの第一楽章、アンダンテ・ウン・ポコ・アダージョの第二楽章、ロンド・アレグレット・グラツィオーソの第三楽章よりなる 20 分足らずのピアノ・ソナタです。



Christian Cannabich

K310 ピアノ・ソナタ 第 8 番 イ短調は、1788 年の初夏にパリで作曲されたピアノ・ソナタ群のうちの最初のもので、アレグロ・マエストーソの第一楽章、アンダンテ・カンタービレ・コン・エスプレッソシオーネの第二楽章、プレストの第三楽章よりなる同じく 20 分足らずのピアノ・ソナタです。

K311 ピアノ・ソナタ 第 9 番 ニ長調は、1777 年 11 月のはじめに作曲されました。マンハイムで数あるピアノ・ソナタの中でも傑作の一つに数えられるのが、このピアノ・ソナタ 第 9 番 ニ長調です。アレグロ・コン・スピリトの第一楽章、アンダンテ・コン・エスプレッシーヴォの第二楽章、ロンド・アレグロの第三楽章からなる 15 分余りの作品です。特に第二楽章のエスプレッシーヴォの美しさと終楽章の協奏的な奔放さは、今までのピアノ・ソナタを大きく凌ぐ傑作と言われます。

K330 ピアノ・ソナタ 第 10 番 ハ長調は、1778 年の夏の作と言われています。5 曲あるパリ・ソナタの中では、比較的に小規模な作品で技巧的にも優しく、パリの華やかな様式を反映した愛らしい美しさは、比べるものはありません。どの主題も、一時的な短いモチーフまでも、同じ形で反復することがなく、巧みな変奏法で多彩に形を変えて現れ魅力を加えます。アレグロ・モデラートの第一楽章、アンダンテ・カンタービレの第二楽章、アレグレットの第三楽章よりなる 20 分足らずの作品です。

K331 ピアノ・ソナタ 第 11 番 イ長調は、「トルコ行進曲付き」のピアノ・ソナタとも呼ばれるように第三楽章のアラ・トルカ、つまり「トルコ風」という行進曲で、とても有名になりました。第三楽章だけ独立で演奏されることも多く、またピアノ・ソナタの演奏会のアンコールで取り上げられることも多い傑作で、1778 年夏にパリで作曲されました。面白いのはソナタと言いながらも全 3 楽章に一つもソナタ形式の楽章がないことです。第一楽章はアンダンテ・グラツィオーソの主題と変奏、第二楽章はメヌエット、そして、第三楽章はア

ラ・トゥルカ アレグレットです。

K332 ピアノ・ソナタ 第12番 へ長調は、1778年の夏にパリで作曲されました。前曲とは反対に全3楽章ともにソナタ形式で、主要な主題はすべて二本立てになっていて、美しいメロディで満たされています。特に火花を散らすような輝かしい終楽章は傑作ではないでしょうか。アレグロの第一楽章、アダージョの第二楽章、アレグロの第三楽章よりなる ピアノ・ソナタです。

K333 ピアノ・ソナタ 第13番 変ロ長調は、1778年の秋の終わりのものと見られており 5曲あるパリ・ソナタのシリーズで最後のものとなります 5曲のパリ・ソナタの中ではもっともスケールの大きな堂々たる風格を備えている点で、「大きな変ロ長調」とも呼ばれています。全体のスタイルに、パリ趣味の反映と見られるものが少ないため、あるいは、むしろウィーン古典派的でもあるので、ザルツブルクに帰ってからの作だと言う説もあります。アレグロの第一楽章、アンダンテ・カンタービレの第二楽章、アレグレット・グラツィオーソの第三楽章 よりなる 20分程の曲となります。

※K312～K329については、この後（次号）に記します。